ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　14

パステルナーク
ショーロホフ
アストゥリアス

訳者　工藤幸雄
工藤精一郎
鼓　直
木村栄一
磯谷　孝
牛島信明

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和46年11月5日　発　行
発行者／石川数雄
発行所／株式会社 主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台 1－6
郵便番号 101
振替 東京 180 番
電話 東京(03)294-1111(大代表)
印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社 1971 Printed in Japan
0397-522146-3062

目次

パステルナーク

選考経過…シェル・ストレムベリイ……磯谷　孝訳…6
授与声明…アンダーシュ・エステルリング……磯谷　孝訳…10

自伝的エッセイ……工藤幸雄訳…11

詩集 心晴れるとき……工藤幸雄訳…53

人と作品…ロゼット・C・レイモント……磯谷　孝訳編…67
著作目録……磯谷　孝編…412

ショーロホフ

選考経過…シェル・ストレムベリイ……磯谷　孝訳…84
授与演説…アンダーシュ・エステルリング……工藤精一郎訳…88
受賞演説……工藤精一郎訳…90

ドン物語……工藤精一郎訳…93

ぼくろ 95　牧夫 102　食糧委員 110
シバーロクの種 114　イリューハ 118　瓜畑の番人 123
一つの道 132　ててなし子 161　渦 179
曲がった道 190　ふたり夫 197　仇敵 210

人と作品…ジョルジュ・A・ルーラック……磯谷 孝訳…221
著作目録……磯谷 孝編…415

アストゥリアス

選考経過…シェル・ストレムベリイ……牛島信明訳…232
授与演説…アンダーシュ・エステルリング……鼓 直訳…236
受賞演説……鼓 直訳…238

大統領閣下……鼓 直／木村栄一訳…241

人と作品……403
人と作品……鼓 直…404
詩人アストゥリアスを讃える……カルロス・マルティーネス・ドゥラン……牛島信明訳…406
著作目録……鼓 直編…417

肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、82、230
カラーさしえ／ロワイヤ(バステルナークの作品)…16～17、48～49
ジャック・ベクナール(ショーロホフの作品)……128～129、192～193
フォンタナローサ(アストゥリアスの作品)……256～257、304～305、352～353、392～393

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ボリス・パステルナーク

一九五八年受賞（六十八歳）
（ソ連　一八九〇～一九六〇）

自伝的エッセイ

詩集
心晴れるとき

パステルナーク

選考経過

授与声明

パステルナークに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官
シェル・ストレムベリイ

一九五八年におこったボリス・パステルナークへのノーベル賞授与をめぐる問題は、ノーベル賞の歴史において、異例な出来事であった。今後もこのケースだけが異例な出来事として残るであろうが、心からそう希望せずにはいられない。文学賞がこんなにも世界中の世論を沸騰させ、ジャーナリズムを賑わせたことはかつてなかった。結局、ロシアのこの偉大な作家は、周知のごとき苦しい立場におかれて、それを辞退することを余儀なくされたのである。この文学界の出来事は、時を移さず、大きな政治的事件にまで発展してしまったが、この件に関する書簡や新聞の切り抜きなどは、ノーベル財団およびノーベル文学賞の授与者であるスウェーデン・アカデミーの文書保管所におさめられ、同所に保管された膨大な数にのぼる分厚な関係文書の一部となった。

先例をもとめるならば、一九三六年にも、ノーベル平和賞をドイツのジャーナリスト、カルル・フォン－オシェッキーに授与することに決定したために一騒ぎが持ち上がっている。彼は勇敢にもナチスの総統に反抗しながら、ヒトラーの牢獄の中で衰弱していくところだった。ヒトラーは、この事件を口実にして、その「臣民」にたいし、今後ノーベル財団から与えられる賞は、どんなものであれ、受けとることはまかりならぬ、と命じたのである。断わっておくが、ノーベル財団の方では、このような突飛で無礼な態度に屈しなければならない義務など、全然ないと考えた。それから三年後にも同じように、王立カロリン医学研究所は、ためらうことなく、ドイツ人学者のゲルハルト・ドマーク教授にノーベル医学賞を授与している。もっとも、教授はそのノーベル賞のメダルを手に入れるのにナチス政権の崩壊まで待たなければならなかった。

パステルナーク事件は、少々異なった趣を呈する。一般に主張されたところでは、ノーベル賞はとりわけ、いや、ひとえに、彼の有名な小説『ドクトル・ジバゴ』に対しておくられた、ということになっている。この小説は、多かれ少なかれ作者の自伝的要素を持ったもので、一九五四年以来、ソヴィエト・ロシアで出版しようとして果たされなかったものだ。四十年前に樹立されたこの政体の、根本とまではいわないまでも、いくつかの面をほとんどあからさまに批判したような作品にたいしては、ソヴィエトでの市場は閉ざされていることをよくよく承知していたので、作者は、その手書きのコピーを個人的な友人で、かつ外国での代理人であるミラノの編集者、フェルトリネリに渡したのである。この人は共産党のシンパと見なされていたので、ソヴィエトからうまくこの貴重な原稿を持ち出すことができた。そして、もしパステルナークが強制されて彼、すなわちフェルトリネリにたいして抗議の声明を公にするようなことがあっても、そんなことにはおかまいなしに出版するようにという内密の指示を受けてきたのだった。パステルナークの名はすでにながいこと、最も有望なノーベル賞候補の一人にあがっていたので、一九五七年にイタリア語版の初版がでると、それは、フランス語、英語、ドイツ語、そしてもちろんのことスウェーデン語といった諸外国語に翻訳されたのである。ロシア語の原書はアムステルダムで印刷され、一九五八年夏に、ブリュッセルの万国博覧会のソヴィエト館でほとんど公然と売りさばかれたあと、こっそりロシアに持ちこまれた。

しかしながら、クレムリンはこの一件を知らないでいたのか、あるいは黙認しているかのどちらかであった。また、ソヴィエトの出版界も慎重に沈黙を守っていた。おそらく、当のパステルナーク自身も危険な時期は去ったと思ったのだろうが、そうしたところへ、ノーベル賞授与決定という一大事がおこって、この沈黙をセンセーショナルに破ってしまったのである。その少し前、彼はモスクワの近郊にある自

分の別荘に、スウェーデン語版の翻訳者を迎え入れて、あの反響を呼んだインタビューを行ない、ソヴィエト政権の主義主張とは相いれないくだりを引用しながら、自分の作品についてきわめて自由に物語ったのだった。

ソヴィエト側のしめした、このまことしやかな寛大さはどのように説明したらよいのであろうか。実はその年、ストックホルムからいろいろなうわさが伝わり、だんだん本当らしいということになったが、モスクワの文学界はこれを真に受けて、自国の作家たちのなかからだれか、とりわけ、ソヴィエト文学の大御所と見なされていたショーロホフあたりがノーベル賞を受賞するのではないか、と心から期待していたのである。ショーロホフといえば、世界中の国語に翻訳された『静かなドン』の作者であり、この作品が傑作であることは衆目の一致するところであるが、彼もライバルのパステルナークと同じように海外で強力に推賞され、ながいこと、ノーベル賞候補に上っていた。もっとも、パステルナークのほうは、彼に比べると知名度はひくかった。こういうわけで、下手な運動をして、このお気に入りの作家のチャンスをぶちこわしてしまうわけにはいかなかったのである。ついでに昔をふりかえってみると、一九三三年には、ロシア文学はじめてのノーベル賞が、当時まだ生きていたかの有名なゴーリキーを素通りして、亡命作家ブーニンの手に納まっているが、その時にはソヴィエト側はべつだんいやな顔もせずに黙って見守っていたものだった。しかし、それから二十五年を経て、スウェーデン・アカデミーがソヴィエト政権の桂冠詩人ともいうべきショーロホフよりもパステルナークを優先したとき、モスクワ文学界がどれほど深い失望を味わったかは、容易に察せられる。

早速、憤懣がぶちまけられるようになった。どうやら、騒ぎたてさえすれば、当局から無条件の支持が得られると期待したらしく、事態をいたずらに誇張したのである。ここで注目すべきことは、政府の要人で文化大臣の職にあったニコライ・ミハイロフが、パステルナークをめぐる特殊な事情を知らず、虚をつかれて、ロシアの作家として彼にノーベル賞が授与されたことに満足の意を表明したという事実である。そもそもパステルナークにたいして不名誉な攻撃の火ぶたを切ったのは、スルコフと称する有力な批評家を議長にいただくソヴィエト作家同盟と、その勢力下にある諸文学団体であることを忘れてはならない。ニキータ・セルゲーヴィチ・フルシチョフによる公式な攻撃や、もしノーベル賞を受賞するならば、ロシアに留まることを禁じるし、そればかりかその他の報復手段もとるという当局の措置は、パステルナークのかつての同僚たちがおこなったはげしい攻撃にひきつづいて取られたものなのである。こうしてパステルナークは、不幸にも、人民の敵、自分の地面をけがす豚、祖国をユダと同じように三十デナリウスで売ってしまった裏切者、という烙印を押されてしまったが、その気になりさえすれば、亡命して、作品の海外での翻訳料で静かな生活を送ることもできたであろう。彼の作品の一つである『ドクトル・ジバゴ』だけでも、ノーベル賞の賞金を数倍も上まわる印税を彼にもたらしていたからである。侮辱を浴びせられ、吹きすさぶ攻撃の嵐に打ちのめされた彼はついに屈服し、ストックホルムのアカデミーに心からの感謝の意を述べてから、受賞を辞退する道を選んだ。そして腰を低くして全ロシア人の新しい支配者に個人的な書簡を送り、おこがましいかもしれないが、どうか自分が祖国にとどまり、そこで骨を埋めることを許してくれるように頼んだのである。自分はこれまでも自分の才能が許すかぎりにおいて祖国のために尽してきたつもりだし、これからも常に奉仕したい、というのがそのいつわらざる気持ちだった。彼にしてみれば、ロシア以外の国で生活することは、生き埋めにされるのと同然だったのである。

この悲劇的事件で、スウェーデン・アカデミーはどのような責任を負っているのだろうか。こんなことをいうのは、ほかでもない、この言葉が世界中のジャーナリズムでささやかれているからである。その主張するところによると、パステルナークの選出は、たしかに文学的見地からしても正しいものと認められるが、と同時に、なによりも政治的な理由によって示唆されたもの、ということだった。それはあたかも、反ソ的なデモンストレーションをねらったものであり、なによりも当事者であるパステルナークにそのためにどんな結果が降りかかってくるかは、はじめからわかりきっていた、とでもいっているようであった。

たしかにここには、一抹の真理があるかもしれないが、全面的にその通りというわけでは決してない。スウェーデン・アカデミーは、ひ

とたび決定を行なった以上、たとえ無意識的なものであれ、なにか政治的な下心が隠されているのではないか、という疑惑を払うために、できうるかぎりのことをしており、これは否定できない事実なのである。

さて、そういうわけで、スウェーデン・アカデミーがパステルナークに眼を向けるようになったのは『ドクトル・ジバゴ』によるものだ、という俗説は正しくない。実際、パステルナークは、一九四六年に英国側から推挙されて以来、ずっとノーベル賞候補にのぼっており、彼に関する最初の報告がなされたのはその翌年のことだから、相当早くから、有力候補にのしあがっていたことになる。詳細をきわめたこの報告書は、有名なスラヴ学者の、アントン・カルルグレン教授によるものである。この報告書がなによりもまず最初に確認していることは、パステルナークがスウェーデン・アカデミーのノーベル賞委員会に推薦されたはじめてのソヴィエト作家であり、少なくとも西欧にいるその道に詳しい批評家たちの意見では、ソヴィエト詩壇の第一人者ということである。他方、パステルナークはロシアの現代作家の中ではもっとも高踏的であり、もっとも一般読者にとって近づきにくい作家といえよう。ことに報告者の主要な研究対象である詩作の分野でそうであるが、これにたいして、散文物語の分野では、心のもっともこまやかな動きをとらえることにかけて類まれな才能が発揮されており、マルセル・プルーストのような西欧の刷新的作家に近いといえる。要するに、パステルナークはもっとも非ロシア的、西欧的なソヴィエト作家であり、それがわざわいして、御用批評家連からは、いく度かお目玉をちょうだいしていた。彼らの意見では、彼の文学的活動は、腹立たしいほど「人民性」を欠いていたのである。

政治的偏向については、まだ問題になっていなかった。『ドクトル・ジバゴ』に先だつ作品のなかには、一つの時代、一つの社会全体を、かくもリアリスティックに、雄勁に描きだしたこの大ロマンを予測させるものはなにもない。十年後、それがイタリア語で出たとき、スウェーデン・アカデミーの常任理事であるアンダーシュ・エステルリング氏は、ためらうことなく、それを文豪トルストイの『戦争と平和』と比較している。一九五八年一月の『ストックホルム・ティーニンゲン』紙の中で、氏は自分の考えを要約して、「そこには非常に強い愛国心が流れている。しかし、空疎な宣伝的レトリックは、影すらもない」と述べ、さらに次のように結論している。「考証が豊かなことといい、地方色が強烈にもりこまれていることといい、さらにまた、心理的な率直さといい、この作品は、ロシアではまだ文学における創造力が汲み尽くされていないことをまぎれもなく証明している。ソヴィエトの官憲当局が真剣になって、この作品がその故国で出版されようとするのを妨害しようと考えているなどとは到底信じられない。」

授賞決定の日の晩、エステルリング氏は、この新しい受賞者をラジオで紹介しながら、ほぼ同じように控えめで穏やかな言葉をもって、「おもいがけない朗報として、昨年世に出た『ドクトル・ジバゴ』について物語った。この弁士は、栄ある受賞者に嵐が浴びせられるのを予期したかのごとく、「彼は革命そのものを批判してはいない。彼が拒んでいるのは、その後に起こった奴隷制的搾取なのである」と断言した。この高邁な演説の結びを次にあげるが、事態の本質をはっきりさせている。

「かくも困難な状況下で、これほどの威厳をもった作品を完成することができたということは、まことに大した偉業というほかない。それはいとも超然として政治的偏見という障壁を上から見下ろしており、そのヒューマニスティックな意図は、むしろ、反政治的証言である。その才能の偉大さといい、思想の純粋さといい、ボリス・パステルナークは、ノーベル文学賞受賞の条件を十分に満たしているのである。」

スウェーデン・アカデミーはその選考にあたって、できるだけ政治色を取り除こうと、それなりに配慮をしたのであるが、それを証明するものとしてほかにも次のような例がある。すなわち、問題の『ドクトル・ジバゴ』は、たしかにパステルナークのもっとも重要な作品にはちがいないが、ノーベル賞授与の決定にあたって発表された簡単な理由書のなかに、その名はあげられていないのである。これは過去にいくどとなく守られてきた慣例に反するもので、たとえば、ハムスン、レイモント、トーマス・マン、ゴールズワージ、マルタン・デュ・ガールなどはすべて、その主要な作品の名があげられてある。そこで次に、パステルナークへのノーベル賞授与の理由書の原文（非常に慎重に起草されている）をあげておこう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「スウェーデン・アカデミーは、一九五八年十月二十三日、ボリス・パステルナークにたいし、現代叙情詩ならびに偉大なロシア文学の伝統の領域においてなされた勝れた貢献により、ノーベル文学賞を授与することに決定した。」この原文は、ノーベル財団の年報にとどめられているが、そこにはまた何のコメントもなしに、こうつけ加えてある。「パステルナーク氏は、数々の理由により、ノーベル賞を辞退すべきものと判断した。」

モスクワ駐在スウェーデン大使は、田舎にいるパステルナークの住所を知らなかったので、これまでの慣例に反して、授賞の知らせを彼のもとにとどけることができなかった。それから二、三日して、ソ連の上層部がいろいろな動きをみせるようになると、この若い代理大使は公式的な手続きを行なうことは一切差しひかえたほうが得策と考えたのであった。また、スウェーデン政府当局が、ソ連の指導者たちがこのデリケートな問題を政治的な領域にもちこんでしまってからの事態の進展ぶりをずっと知らされていたのもたしかである。しかし、ここでパステルナークのために一つの政治的な手が打たれた。それは当時、インドの首相であったパンジット・ネールがインド文学アカデミー総裁の資格で、迫害をやめさせるべく、フルシチョフ氏にとり計らうように、モスクワ駐在インド大使に命じたのである。メノン氏は外務次官に迎えられた。次官は、パステルナークにたいしてソ連のジャーナリズムが浴びせた攻撃のひどさ、言葉の乱暴さを認めながらも、外国のジャーナリズム、いや、そればかりか、アメリカその他の国では現職の大臣すらも、パステルナークのノーベル賞受賞を棍棒がわりに利用してソ連人民を打ちすえてくる以上、どうしてもやり返さざるをえない、と、しごく当惑した様子で反論したようだった。

（事件を大きくとりあげたパリのある大雑誌の印象的な文句をそのまま借りていうと）この「文化界におけるハンガリー事件」によってひきおこされた海外での反響が、よい結果をもたらしたことは、うたがうべくもない。いたるところで人々が主張したとおり、多くの国の文学団体のはげしい訴え、とりわけ、世界中の自由主義的ジャーナリズムが示した激しい反応がパステルナークの完全な自由とまではいかないまでも、少なくとも、その生命を救ったのかもしれない。しかし、この相対的自由も、自分に与えられたノーベル賞を辞退することによってあがなわなければならなかった。彼はスウェーデン・アカデミーにフランス語でかかれた短い電報を送り、次のようにノーベル賞を辞退したい旨、伝えたのだった。

「この栄誉に浴することが私の属している社会でどのような意味を持つのか、ということを考えあわせてみると、私は自分に対して与えられたこの過分なる賞を辞退せざるをえないのです。私のこの自発的な辞退をどうか悪くおとりになりませんように。」

どうみても悲しいというほかないこの知らせが入ると、エステルリング氏は、早速スウェーデン・アカデミーの名において、同じように簡単な返事を送り、遺憾の意と同情と敬意を表明したのであった。ノーベル賞の賞金は、現行の定款にしたがってノーベル財団に返されたが、受賞者の名はその「自発的」辞退にもかかわらず、ノーベル賞受賞者リストのなかに記されておかれることになった。

その年の十二月十日、おごそかなノーベル賞授与式の席上でエステルリング氏は、パステルナークの名をあげてその授与理由を述べるだけですました。そして辞退されたにもかかわらず、この栄誉は無効ではないことをつけ加え、ノーベル賞の引き渡しが行なわれないことに遺憾の意を表明したのである。コンサート・ホールでひらかれた授与式の最後にこの言葉が述べられると、場内に重い沈黙が訪れた。ストックホルム市の市庁では、ノーベル賞受賞を祝して恒例の大パーティーがひらかれたが、その席上で述べられた演説には、パステルナークのことについては一言もふれられなかった。ソヴィエト大使もこのパーティーに列席の栄を賜うたが、それは好ましからざる文豪にたいして自分たちの主が勝利をおさめたことを祝いにきたのではなく、その年、三人の同胞がグループでノーベル物理学賞を受賞したので、礼をつくして彼らの同伴をつとめるためであった。

さて、『タイムズ』紙は、ソ連の指導者たちが演じたこのなげかわし

い茶番劇を前にして、「いつの日か、ロシア人たちがパステルナークとその作品を誇りに思うような時が来るであろう」と述べ、その強い所信を表明したが、私は筆を置くにあたって、この言葉の中にせめてもの慰めを見出したい。『ニューヨーク・タイムズ』も、このうやまうべきロンドンの同僚の言葉に同調して、こう述べている。「ノーベル賞はパステルナークに栄誉をもたらしたが、それは単に彼のみならず、ソヴィエトで厳しい全体主義の圧迫にたちむかい、芸術的創造の保全、自由と真実のために闘っているすべての人々にも栄誉をもたらすものなのである。これは疑うべくもない事実である。」　（磯谷　孝訳）

パステルナークに対する ノーベル文学賞授与についての声明

スウェーデン・アカデミー常任理事
アンダーシュ・エステルリング

一九五八年十二月十日

今年度のノーベル文学賞は、現代叙情詩ならびにロシアの偉大なる小説の伝統に対する優れた功績にかんがみ、スウェーデン・アカデミーによってソヴィエト・ロシアの作家ボリス・パステルナークに授与されました。

これに対して同氏は、周知のごとく、この栄誉を辞退したい旨、伝えてきましたが、同氏の辞退によってこの度の授賞の効力が決して変わるものでないことは、言うまでもありません。スウェーデン・アカデミーとしましては、遺憾ながら、同氏へのノーベル賞授与は行なわれない、ということをお知らせするばかりです。

ボリス・パステルナークがノーベル文学賞受賞者に選ばれたという公式コミュニケをスウェーデン・アカデミーが発表してから二日後、すなわち、一九五八年十月二十五日に、同作家はアカデミーあてに「心から感謝、感激。誇り、驚きと困惑を感じている」という電報を送ってきた。さらに十月二十九日、これにつづいて次のような主旨の電報が届いた。

「この栄誉に浴することが私の属している社会でどのような意味を持つのか、ということを考えあわせてみると、私は自分に対して与えられたこの過分なる賞を辞退せざるをえないのです。私のこの自発的な辞退をどうか悪くおとりになりませんように。」　（磯谷　孝訳）

自伝的エッセイ

АВТОБИОГРАФИЧЕСКИЙ ОЧЕРК

工藤幸雄訳

目　次

幼年時代……13
スクリャービン……16
一九〇〇年代……21
第一次大戦まで……33
三つの影……44
むすび（その一）……50
むすび（その二）……51

幼年時代

1

自伝の試みとして一九二〇年代に書いた『安全通行証』のなかで、わたしは自分を作りあげた人生のさまざまな状況を解きあかした。惜しまれるのは、あの著作がそのころの通弊として、不必要な気どりにそこなわれていることである。

今回のスケッチでは、できるかぎり繰返しのないよう努めるつもりだが、以前に書いたこととの若干の重複は避けられまい。

2

わたしは一八九〇年、旧暦一月二十九日[1]モスクワに生まれた。場所はオルジェイヌイ小路、神学校向かいのルイジン館である。わたしは秋の日、乳母につれられて神学校構内の公園を散歩したような記憶を何かしらぼんやりと持っている。落葉の散りしいた湿った小道、池、築山、ペンキ塗りの神学校の鉄柵、昼休みに遊戯や争いに興じる神学生たちの笑いさざめき――。

神学校の正門の、ちょうどま向かいの石造りの二階建には、辻馬車のたまり場になる中庭がついていたが、わたしたちの住居は、この家の入口に突きでたアーチ型の壁のうえにあたる一画だった。

3

幼年時代の感覚は恐怖と歓喜との二つの要素から成りたっていた。それはお伽話めいた色彩にいろどられていて、もとをたどれば、二つの中心的な形象にさかのぼる。それ以外のものはこれらに支配され、統一されてしまうのである。一つはカレートヌイ市場の箱馬車作りの店先にあった剝製の熊、もう一つは猫背で毛ぶかく、聞きとりにくい低音で話しかける好漢の大男ペ・ペ・コンチャロフスキーとその家族、彼のアパートの部屋にかかっていたセローフ、ブルーベリ、ワスネッォフ父子の鉛筆、ペン、墨で描いたデッサンのかずかずである。

この界隈は、トベルスキエ・ヤームスキエ、トルーバ、ツベトノイ小路とどこも、もっともいかがわしい場所だった。わたしは始終、連れのおとなに手をとられた。覚えてはいけないこと、聞いてはいけないことばかりだったからだ。とはいうものの乳母や子守りたちに孤独が堪えられるはずもなかった。こうしてわたしは、そのころ雑多な人びとに取りまかれて暮らした。それから正午になると、ズナメンスキエ兵営の練兵場では騎馬憲兵の教練があった。

このように、乞食や巡礼と近づきになり、零落の人びとの世界と身ぢかに住んで、日ごろ近所の通りで彼らの身上話やヒステリーを見聞した。

このためにわたしは、早くからませていたのか、その後一生をつうじ女に対しては息がつまるほどの恐怖感のまざった憐れみを覚えるようになったし、また、わたしより先に死ぬ運命にある両親にはもっと堪えがたい同情を感じるようになった。ふたりが地獄の責苦から免れるようにするには、聞いたこともないほどにすばらしい、前例のないなにかしらを、わたしがやりとげなければいけないのだった。

4

わたしが三つのとき、一家は郵便局の向かいにある、ミャスニツカ

1 新暦二月十日。

ヤ街の絵画・彫刻・建築学校の校舎に付属する官舎に引っ越した。住居は本館からはなれた、中庭に面する翼棟の一画だった。

本館というのは古い美しい建物で、さまざまないわれがあった。一八一二年の大火[1]では類焼をまぬがれた。その一世紀前、エカテリーナ女帝の治下[2]には、フリメーソン[3]の隠れ家に使われていた。ミャスニツカヤとユシコフ小路の角にのぞむ弓型の側面には列柱のついた半円のバルコンができていた。広々としたバルコンは建物の凹みのようになっていて、学校の講堂に通じていた。このバルコンに立つと、遠く停車場の方へと一条につらなるミャスニツカヤの町並が見はるかせるのだった。

官舎に住む人たちが、一八九四年、アレクサンドル三世の大葬の儀や、二年後のニコライ二世戴冠の行事の光景を見守ったのも、この同じバルコンからだった。

そこには学生や教師たちが立っていた。母は群衆にまじって両手にわたしを抱きあげながら、バルコンの手すりによりかかっていた。母の足下には深淵が口をあけていた。その底では砂をまいたがらんとした通りが、かたずをのんで待ちかねていた。兵士たちがせわしげに、大声で号令していたが、その声はバルコンにいる観衆の耳にはとどかなかった。それは、あたかも、道の両側に立ちならぶ兵士たちのために車道から歩道のはじに押しやられ、息をつめ、静まりかえっている数千数万の人びとの沈黙が、水を吸いこむ砂のように、あらゆる物音をきれいさっぱりと飲みこんでしまったかのようだった。

寺院の鐘がもの悲しげに、長い余韻を残しながら、いっせいに鳴りはじめた。遠くから寄せ、さらに先へとうねって行く波のように、次から次へと人びとの手があがって、モスクワは脱帽し十字を切った。

八方からとどろきかわす弔砲につれて、果てしない葬列の先頭が見えはじめた。軍隊、僧侶、黒の馬衣と羽飾りをつけた馬、想像もおよばぬほど豪奢をきわめた棺台、古式ゆたかな珍しい衣装を着た式部官——こうして葬列はあとからあとから進んだ。建物の正面には幅広いクレープの帯が張りめぐらされ、黒い喪章がかかっていて、半旗が低くうなだれていた。

こうした派手好きな趣味は美術学校と、切りはなせないものだった。学校は宮内省の管轄だったし、セルゲイ・アレクサンドロウィチ大公[4]は、監督官として学校の式典や展覧会に臨席した。大公は痩せてのっぽな人だった。コリーツィン家、ヤクンチコフ家の夜会などに大公がおでましになると、父やセローフは帽子のかげに画帳をかくしながら、大公のカリカチュアをスケッチした。

5

中庭にあるわたしたちの棟は、ひじょうに古い老木の茂った小さな庭園に通じる木戸に面し、別館、付属建物、物置などにまじって立っていた。地下室は学生に暖かい昼食を出す食堂になっていた。だから階段の昇り口は、いつも油で揚げたビロシキやカツレツの匂いをただよわせていた。階段をあがった最初の踊り場に、わたしたちの居室にはいるドアがあった。上の階には学校の書記が住んでいた。

そのころから五十年、ソビエトの時代になり、最近、わたしはエヌ・エス・ロジオーノフの著『エリ・エヌ・トルストイの生涯と作品における モスクワ』[5]を読み、一二五ページ、一八九四年の項につぎのような一節を見つけた。

十一月二十三日、トルストイは令嬢をともなってバステルナーク家の演奏会を聞くため、絵画・彫刻・建築学校内の同家をおとずれた。レオニード・オ・バステルナークは同校校長であった。バステルナーク夫人と、音楽院のバイオリン教授イ・ウェ・グルジマリと、セロ教授ア・ア・ブランドゥコフが合奏した。

そのとおりだが、一個所だけちょっと誤りがある。美術学校長はリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com